

黒部川扇状地における農村の生活組織と持続可能性 －入善町古黒部地区を事例として－

栗林 賢・樋上龍矢・石坂 愛・今井剛志・林 琢也・田林 明

キーワード：古黒部地区，農村，持続可能性，生活組織，圃場整備事業

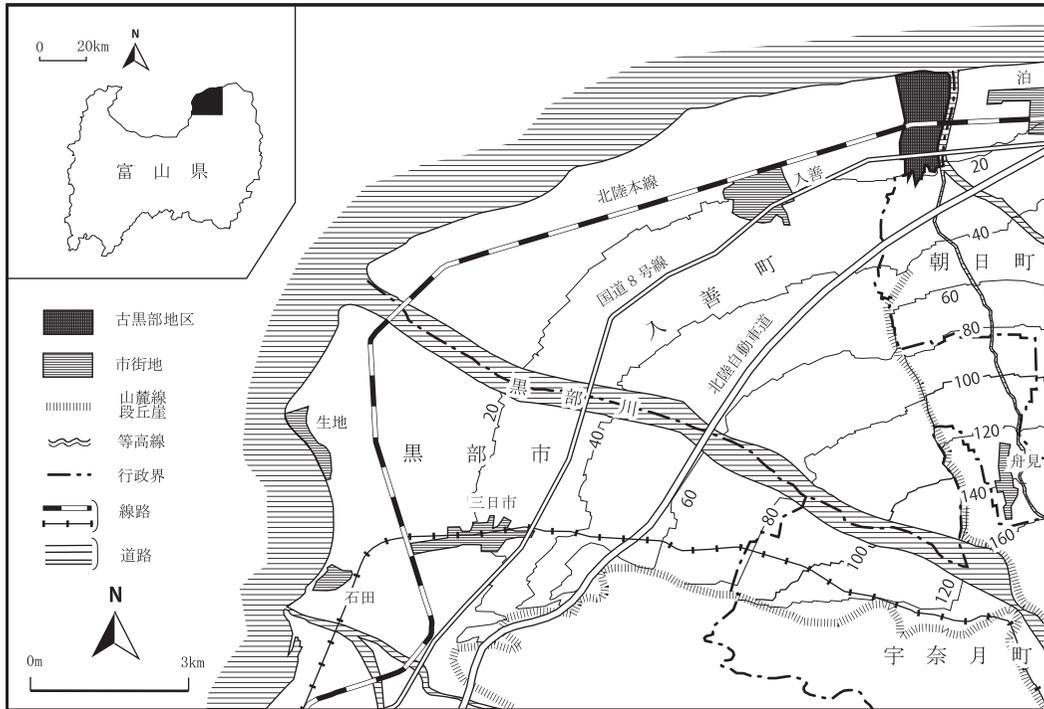
I はじめに

1960年代になって、日本は高度経済成長期に入り、第二次・第三次産業が目覚ましい発展を遂げた。それまで農村で農業に従事していた労働力が他産業に流出し、農家に兼業が浸透していった。これにより、農村では農業を中心とした経済活動は変化し、多様な経済活動が行われるようになった。農民の経済活動が多様化したため、共有の山林や牧野、農業水利あるいは地先の漁場の利用に象徴されるような共同体的基盤に基づく伝統的な農村社会は変質し、農村においても都市のような個々人の活動に重きが置かれるようになった（田林，2003）。徐々に組織的な活動が失われていく中で、既存の研究では農村の住民が組織する自治組織や社会組織、生産組織、宗教組織、余暇組織を通じた住民同士のコミュニケーションや組織的な活動の重要性が、今後の農村の維持・活性化において重要な役割を果たすことが指摘されている（田林・菊地，2000）。

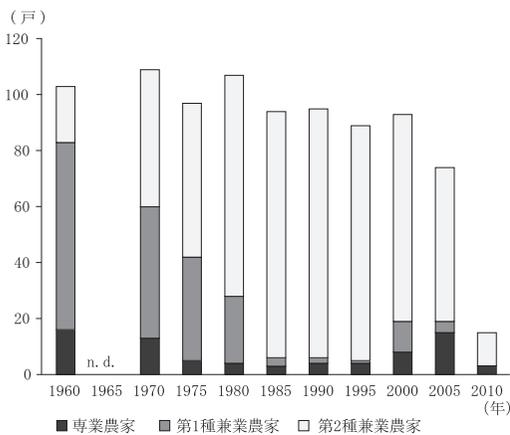
本研究は入善町古黒部地区を対象とし、農村の持続可能性について検討する（第1図）。これまで古黒部地区は田林（1993，1994，2000，2003）によって農村としての性格の解明が行われてきた。古黒部地区は大正期から昭和初期にかけて洪水被害の復旧事業の一環として耕地整理が実施されたが、その後1990年代に至るまで圃場整備事業

が行われなかった。そのため、農道や用水路は狭小で錯綜し、さらには畦畔を徒歩でわたらないと到達できない水田も多数存在していた。農家の営農意欲は決して高くなく、1985年以降、第2種兼業農家が90%以上を占めてきた（第2図）。また、経営規模は1960年から現在に至るまで、多くの農家が1～2haであったが、前述したように農家の生産意欲は高くなかったため、粗放的な栽培が行われていた（第3図）。このように、地区内における農業は生産による利潤を目的としたものではなかった。しかし、自家の耕作地が他家のものと混在しているため作業を放棄するわけにはいかず、古黒部地区の水田の面積は1960年代以降、ほとんど減少することなく維持されてきた（第4図）。前述したように、耕作条件が悪かったため、各農家は農地の維持に多くの労力を必要とした。1980年以降、一時、農業従事者も減少したが、2005年までは一定数を維持していた。また、65歳以上の高齢者が多くを占めているが、各年代の従事者も一定規模存在した（第5図）。このように、古黒部地区では維持しにくい農地が結果として、地区内に一定の人口を滞留させる要因となっていた。そのため、さまざまな生活組織の活動が活発であり、それが農村としての持続性につながっていたと指摘されている（田林，1994）。

しかし、農地は2005年から行われている新規の圃場整備事業によって整備され、同時に農事組合

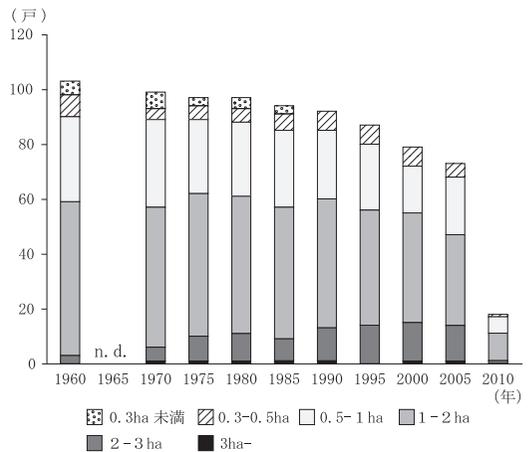


第1図 研究対象地域



第2図 入善町古黒部地区における専業別農家数の推移 (1960-2010年)

注) 2000年以降は販売農家のみの数値
(農業集落カードにより作成)



第3図 入善町古黒部地区における経営耕地面積別農家数の推移 (1960-2010年)

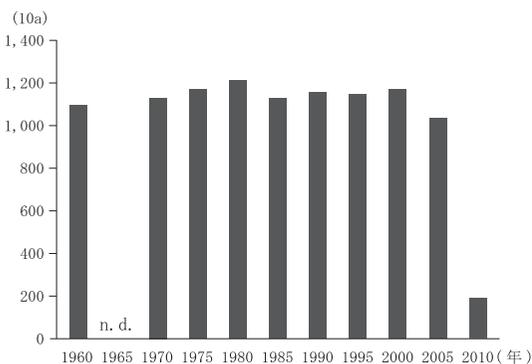
注) 1990年以降は販売農家のみの数値
(農業集落カードにより作成)

法人が設立された。2010年時点で、多くの農家が農事組合法人に加入し、個別的な営農を行う農家は大きく減少した。集落営農に移行したことで、農地維持のために滞留していた人口を地区にとど

める足かせはなくなってしまった。そこで本稿では、田林(2003)の調査から10年近くが経過した現在、古黒部地区が農村としてどのような変化を遂げたのかを経済活動と生活組織の動向に着目し

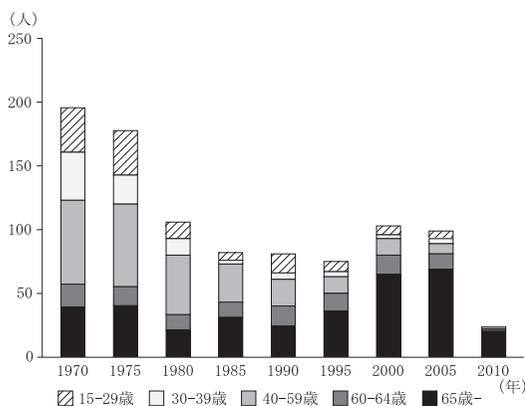
て明らかにし、また今後農村として存続し、活力を維持していくために何が必要となるのかを考察することを目的とする。

入善町古黒部地区は黒部川扇状地の北東部に位置しており、地区の北部は日本海に接し、南部は朝日町舟川新地区に接している。南北約2km、東西約1kmの範囲を占めており、西側の境界はほぼ入川、東側の境界は小川となっている。集落の中心部を東西に北陸本線が通り、南部を国道8号線が通っている。



第4図 入善町古黒部地区における水田の経営耕地面積の推移 (1960-2010年)

注) 2005年以降は販売農家のみ数値
(農業集落カードにより作成)



第5図 入善町古黒部地区における農業従事者の年齢構成の推移 (1970-2010年)

注) 2000年以降は販売農家のみ数値
(農業集落カードにより作成)

Ⅱ 入善町古黒部地区における圃場整備事業の実施

Ⅱ-1 圃場整備事業実施までの過程

古黒部地区では1912年7月22日に小川が氾濫を起こした。その際に被害を受けた水田の復旧工事として耕地整理が行われた。現在の主要地方道入善・朝日線を境に北部で北部耕地整理組合を、南部で南部耕地整理組合を組織した。その後、換地を含めて工事が終了したのが、北部耕地整理組合で1933年、南部耕地整理組合で1949年であった。

耕地整理事業後の水田は、一枚につき南北方向の短編が14.6m、東西方向の長編が54.6mの約8aであり、当時の他地域の水田と比較して、水利条件や耕作の便には優れていた。そのこともあって、古黒部地区では、1960年代から1970年代に黒部川扇状地の他地区で実施された県営の圃場整備事業を実施しなかった。その後、圃場整備事業についての議題が初めて持ち上がったのは1980年代である。当時の古黒部土地改良区の役員が各世帯に圃場整備事業に同意を求めた。その際、約80%の農家が賛成の立場をとったが、圃場整備事業に関する具体的な計画案の説明を土地改良区が行わなかったことなどにより不信感が募り、最終的に計画はとん挫してしまった。次に圃場整備事業が本格的に検討されたのが、1995年の古黒部地区の総合計画策定の時である。圃場整備の可否について農家を対象にアンケートを実施した結果、約85%の同意が得られた。しかし、この時も一部の反対票により圃場整備が実施されなかった。その後、2000年に改めて圃場整備に関するアンケートが行われ、その際にも、一部の農家から賛同を得ることができず、圃場整備事業を進めることができなかった。そして、2002年に古黒部土地改良区が入善町土地改良区と合併したことを契機に、古黒部地区圃場整備組合が設立された。組合の役職として会長と副会長、建設委員、換地委員、営農委員が設けられ、古黒部土地改良区で役員を務めていた人を中心に計31人が役職に就いた。富山県の行政は賛成が100%にならないと圃場整備を行わ

ないという指針を出していたが、南部だけでも県営の圃場整備事業対象基準の20haを越えていたため、2005年に南部から工事が開始され、2010年に完了した。その後の話し合いで北部は反対者の土地を避けて圃場整備を行うという結論になった。しかし、反対者も高齢になり農業を継続するのが困難な状況になったため、2008年には北部でも全農家が賛成に転じた。北部では2009年から工事が開始され、2012年度で完了となる。北部の圃場は約50ha、南部の圃場は約60haである。

Ⅱ-2 農事組合法人の設立と圃場整備事業の実施

古黒部地区では、圃場整備に先駆けて2つの農事組合法人が設立された。その1つである地区の南部の農事組合法人ひまわりは、2005年2月26日に登記された。法人として登記後すぐに活動できるように、2004年の秋に南部営農組合という任意組織を立ち上げ、圃場に大麦を植えた。もう一方の地区の北部の農事組合法人ほたるは、2009年2月28日に登記された。北部では圃場整備の前に、反対者に配慮して交換分合を行い、反対者の分散していた土地をそれぞれ集め、それを避けて圃場整備を実施する計画を立てた。しかしその後、反対者も全て賛成となったため、北部全域を圃場整備することになった。法人として登記後すぐに活動できるように、2008年2月28日に北部営農組合という任意組織を立ち上げ、圃場に菜種を植えた。

圃場整備事業において中心的な役割を担ったのが古黒部圃場整備組合である。古黒部圃場整備組合の営農委員と建設委員、換地委員がそれぞれ役割を分担して事業を進めた。まず、農事組合法人の設立にあたって、営農委員が規約作成や組合の規模（機材の導入台数や人材の確保など）に関する書類の作成などを行った。その後、実際に圃場整備事業が行われる際に、建設委員が県で作成された圃場整備の計画図などを検討し、詳細な地元からの要望を県側へ伝えた。建設委員を務めたのは古黒部地区に立地するH建設の退職者である。また建設委員は圃場整備後の畦畔や水路の修繕も

担当している。圃場整備後は区画が大きくなり従来と全く変わってしまうので、土地の所有者に改めて地番を割り振る必要がある。その役割を担ったのが換地委員である。基本的に地番は以前の土地の位置とは関係なく割り振られたが、国道8号線から南北20mまでの範囲は地価が高いため、この部分だけは元の土地所有者に割り当てられた。また、古黒部地区全体で小作地が10%程度あったので、小作地は地権者と小作人で50%ずつに分けられた。南部の換地は完了したが、北部ではいまだに圃場整備が完了していないため仮換地の状態である。

Ⅱ-3 農地・水保全管理支払交付金を利用した活動

古黒部地区は農事組合法人を設立したこともあり、2007～2011年度の5年間、農地・水保全管理支払交付金対象地区となった。この事業には、当時の区長会長が申請した。申請のための書類作成が煩雑であるため、他地区においては積極的でなかったが、古黒部地区では書類作成に長けた住民がいたことから事業への申し込みを決定した。事業の役員として、会長1人と副会長2人、事務局長1人、会計1人を決めた。事業に採用された後、圃場整備事業が完了した圃場から畦畔に防草シートを張り、カメムシを寄せ付けない効果のある姫岩垂草を植えた（写真1）。補助金は労賃としても活用できたため、道路愛護や江切り、水路保全、草刈り、ゴミ拾いなどに関する作業に従事した大人には1時間1,000円の労賃を支払い、子どもには図書券を配布した。この他にも後に述べる福寿会と婦人会がプランターに花植えを行うなどしている。また、備品として草刈り機も購入し、畦畔の整備を盛年会が担当している。

2011年度の農地・水保全管理支払交付金を利用した作業内容は第1表に示す通りである。4月に農事組合法人ひまわりの組合員による圃場の石拾いが始まり、5～6月に農事組合法人ほたるの組合員が防草シートおよび姫岩垂草の植栽を行った。6月はこの他に福寿会や婦人会による農道へ



写真1 防草シートと姫岩垂草
(2012年9月 栗林撮影)

の花の植栽、黒椀会による水路の排水状況の確認が行われた。7月に入ると、再び農事組合法人ほたるの役員による防草シートの敷設および姫岩垂草の植栽と農事組合法人ひまわりの役員による圃場の石拾いが行われた。また、農事組合法人ほたと農事組合法人ひまわりの両組合員によって水路および農道の草刈りが実施され、ここで役員会や児童会および育成会による巡回点検が行われた。6～7月に自治会とともに農事組合法人ほ

たる・ひまわりの組合員が交互に水路および農道の草刈作業を行った。8月には黒椀会が草刈り状況の巡回点検、盛年会が地域水路の点検を行った。これらの点検によって発見された整備の必要な箇所を、8～12月に補修を行った。最終的には10月の末期に自治会と農事組合法人ほたる、農事組合法人ひまわりの組合員が基盤整備の行われた圃場の石拾いを行い、基盤整備を一通り完成させた。12月はこれらの基盤整備の破損部分を改修し、3月にほたる組合員が再び防草シートの敷設を始め、自治会は水路の泥上げや砂利の補充、暗渠施設の清掃を行い、農業組合法人と協力して圃場の石拾いを行った。以上の作業を通し、事業終了後の村づくりの在り方について、黒椀会による啓発活動を行うことで、1年の活動を修めた。

また、花の植栽や巡回点検をはじめ収穫祭などの地域住民等の交流活動や啓発活動といった景観形成・環境保全計画の内容は、広報誌「環境保全委員会便り」によって適宜公開されてきた。これは2007年度から現在までの5年間で17号が発行された。

第1表 入善町古黒部地区における農地・水保管理支払交付金を利用した事業（2011年度）

月	活動項目	具体的活動内容	責任団体名
4	農用地の除れき	基盤整備の行われた圃場の石拾い	(農)ひまわり組合員
5	きめ細やかな雑草対策	防草シートの敷設および姫岩垂草の植栽	(農)ほたる組合員
	きめ細やかな雑草対策	防草シートの敷設および姫岩垂草の植栽	(農)ほたる組合員
6	施設への植栽	農道への花の植栽	福寿会、婦人会、グリーンキーパー&花の会
	排水操作	開水路の排水状況の把握	黒椀会
7	きめ細やかな雑草対策	防草シートの敷設および姫岩垂草の植栽	(農)ほたる組合員
	草刈り	開水路および農道の草刈	(農)ほたる組合員
	草刈り	開水路および農道の草刈	(農)ひまわり組合員
	施設の点検	農用地・開水路・農道の調査	役員会
	遊休地発生状況の把握	遊休地発生状況の把握	役員会
	施設の巡回点検・清掃	施設の巡回点検・清掃	児童会および育成会
8	農用地の除れき	基盤整備の行われた圃場の石拾い	(農)ひまわり組合員
	地域住民との交流活動	夏祭りの共催	役員会および自治会
	安全点検、地域用水	安全確保の点検、地域用水としての利用	盛年会
	施設の機能診断	施設の機能診断	黒椀会
3	農用地の草刈り確認	個々が行う農用地の草刈り状況の確認	黒椀会
	啓発活動	過去5年間における事業の総括と、これから の農村環境の保全に関する意見交換	自治会
	きめ細やかな雑草対策	防草シートの敷設	(農)ほたる組合員
	水路の泥上げなど	水路・側溝の泥上げ、砂利の補充	自治会

(古黒部地区環境保全委員会提供資料により作成)

Ⅲ 入善町古黒部地区の経済活動

Ⅲ-1 農業

1) 農業的土地利用

古黒部地区の土地利用をみると、水田が卓越しており、農地の大部分を占めている（第6図）。現在、北西部に圃場整備中の箇所がある。基本的に水稲作が行われているが、南部では一部、転作の大豆の栽培も行われている。また、作付前後地はコメの収穫後翌年の植付までそのままの状態にしておくか、もしくは秋に大麦を植えるところである。北部と南部にそれぞれ一か所ずつ立地しているビニールハウスは、各農事組合法人の格納庫付近にあり、水稲の育苗用として利用されている（写真2、写真3）。宅地は水田の中に点在しているほか、県道60号線沿いに多く立地している。国道8号線沿いには商店や飲食店なども複数立地している。現在、県道60号線の北部ではバイパス道路の工事が行われている。1993年時点では、水田の畔を通らないと到達できない水田が多くみられ、場合によっては他人の水田を通過しなければならないことも多かった（第7図）。また、8aの区画の水田を2人や3人に分割しているいわゆる「仲間田」も多く存在していた。しかし、圃場整備事業が実施されたことにより、1区画の標準面積は1haとなり、農事組合法人が設立されたことで農作業や水田の管理は地区全体で一括して行われるようになった。また、農道と水路も新規造成された。一部、圃場整備事業によって宅地の配置も変わっている。2か所にあった墓地は、現在は1か所にまとめられた。さらに、北部には防潮林が造成され、塩害を防ぐ仕組みが整えられた。その他にも維持管理協議会や環境監視委員会等を設置し、圃場の管理に当たっている。このように、圃場整備事業により、古黒部地区の営農環境は大きく変化した。

現在、古黒部地区では県道60号線を境に、北部が農事組合法人ほたる、南部が農事組合法人ひまわりによって農業が行われている。各農事組合法人によって作付けされている作物は異なる。2011

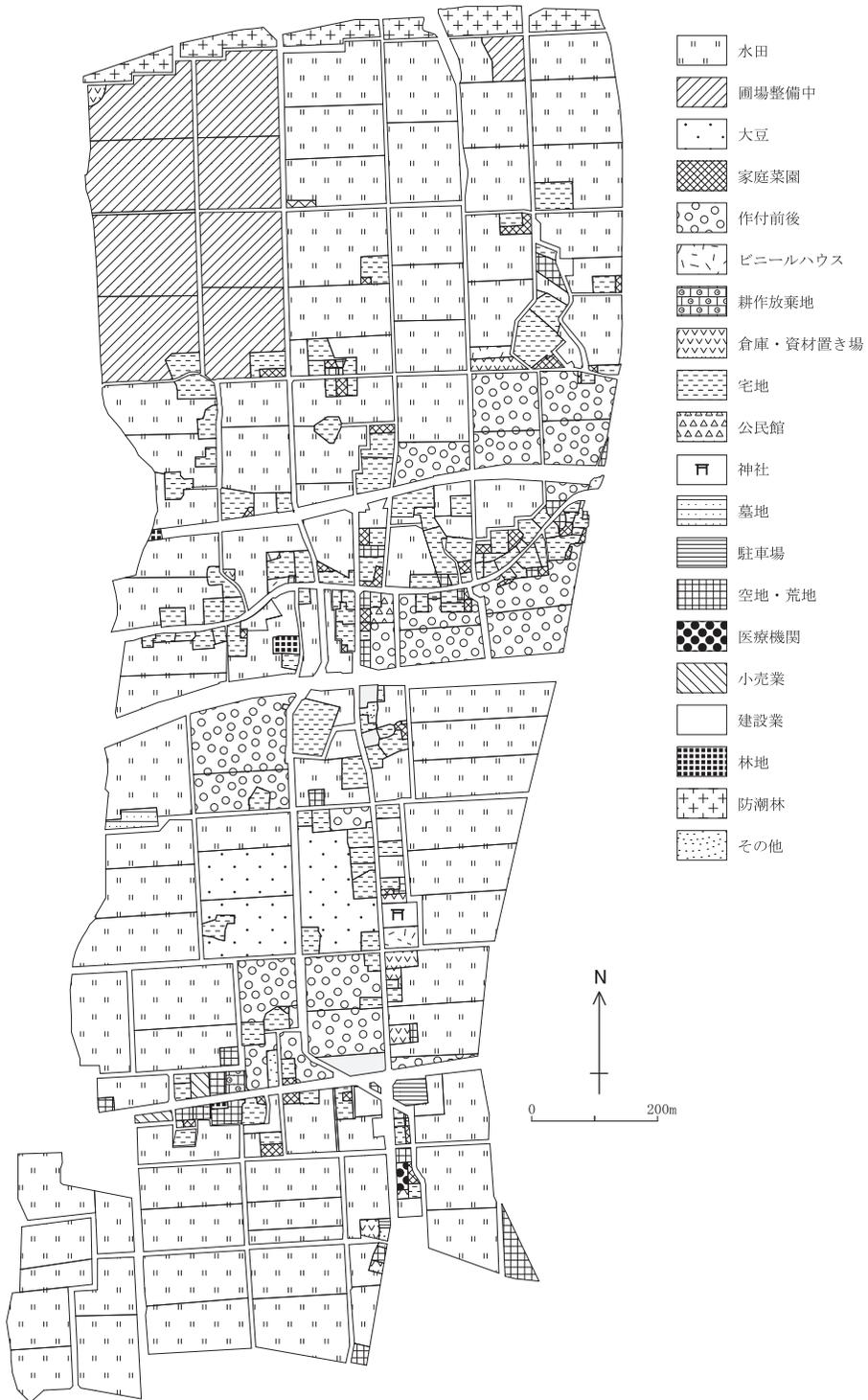
年度の農事組合法人ほたるでは、総作付面積が33.8haで、そのうち水稲として、てんたかく5.8haとコシヒカリ11.1ha、てんこもり12haが作付けされ、転作の菜種は4.9ha作付けされた。2012年度には、水稲としてコシヒカリ29.5haとてんこもり7.0haが作付された。農事組合法人ひまわりでは水稲と転作に伴う畑作が行われている。2011年度には、総作付面積が62haで、そのうち水稲としてコシヒカリ37.1haとてんこもりが5.1ha作付けされ、転作のために大麦14.8ha、大麦の裏作の大豆3.2haが作付けされた。2012年度は、水稲として、てんたかく3.3haとコシヒカリ35.2ha、てんこもり5.4haを作付した。また、転作の大麦を13.1ha作付けする予定である。

2) 農事組合法人の経営状況

(1) 農事組合法人ほたるの経営状況

2011年度の農事組合法人ほたるでは水稲の収穫量がてんたかく448.5俵、コシヒカリ1,117俵、てんこもり1,088俵、菜種の収穫量が442kgであった。しかし、圃場によって収穫量が異なり、2010年度から作付けをしている区域の収穫量は相対的に高いが、圃場整備直後で2012年から作付けされた区域では安定した収穫量を確保できていない。また、菜種に関しても、圃場整備直後の排水不良の影響で、過去最低の収量であった。圃場整備事業の進行に伴って、栽培面積は毎年増加しており、2010年度では水稲の栽培面積は11haであったが、2011年に29ha、2012年度には36haとなった。

2011年度における農事組合法人ほたるの損益計算書は第2表の通りである。2011年における44,932,895円の費用の決算額うち、種苗費や肥料費、農薬費などの生産原価が38,238,716円と85%を占めている。特にその中でも、地代の支払いに5,939,306円、減価償却費に11,600,621円と土地や機材の維持・保有に多額の費用がかかっている。また、44,932,895円の収益の決算額のうち、水稲と菜種の生産物販売高が76%を占めており、農事組合法人ほたるの重要な収入源である。収穫したコメは大部分をJAみな穂に出荷している。また、



第6図 入善町古黒部地区における土地利用（2012年）

（現地調査により作成）



写真2 農事組合法人ひまわりの育苗ハウス
(2012年9月 林撮影)



写真3 農事組合法人ひまわりの格納庫
(2012年9月 林撮影)

要望があれば30kg当たり7,000円で自家消費米として組合員にも販売する。そのほか、入善町に立地している輸出関連会社へ出荷している。

農事組合法人ほたるで主に出役をしている組合員のうち、50歳代は4人、40歳代は6人、30歳代は3人である。30～40歳代の多くが会社員であり、農作業に不慣れな人が多く、農事組合法人ほたるでは人材育成のために技術指導を行っている。技術指導の担当はJAみな穂の機械整備部長を務めている古黒部地区の住民である。農業機械は近年オート機能を搭載しているものが多く、運転・使用方法等の講習会を別途で行っている。

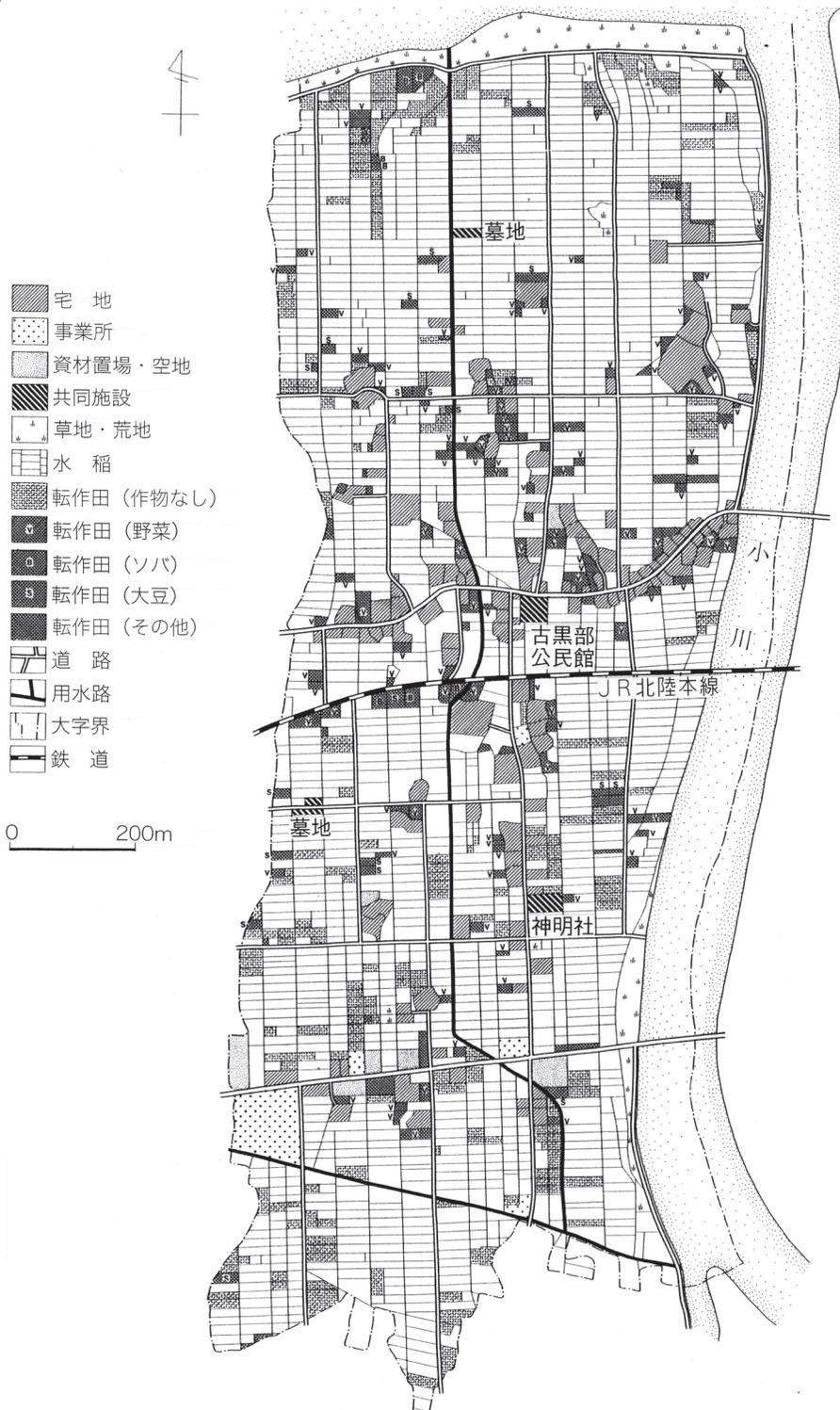
農事組合法人ほたるの主な年間作業としては、4月に耕起・播種作業、5月に田植えおよび定期

総会、6月に姫岩垂草定植と業種刈取、9～10月に稲刈りがある(第3表)。播種作業はもみを消毒してから種を蒔くまでの一連の作業で、以前は各戸で行っていたが、現在は農事組合法人ほたるの播種作業全てを組合員3～4人で行っている。農事組合法人ほたるではトラクターを2台、田植機を3台、コンバインを2台保有している。田植えの際は、田植機1台につき、操縦する人1人、育苗ハウスから苗を運搬する人2人の計3人1組で作業を行う。また、収穫時には、1日1台2ha、計4haずつ稲刈りを進めている。作業は午前8～午後4時で、その後、機械洗浄が行われる。これらの作業以外の組合の行事としては農休みがあり、6～7月頃に日帰りで温泉に行く。2012年度には上市町に行った。

組合員の出役の日程について、主に組合長とオペレーター部長、耕作部長の3人が決めている。昨年度の出役状況をもとに日程案を作成し、その後組合員の予定を聞いて調整を行う。しかし、組合員の予定が急に変更になり出役できなくなる場合は、組合員同士で調整してもらう。出役に対しては1時間あたり1,000円が支給される。現在、出役の中心は高齢者であるが、今後の農業を支えてもらうためにも会社員等の若い世代にもなるべく多くの出役を依頼している。会社員であるY氏の例では、トラクターでの耕起が5日程度で、稲刈りの出役は3日ほど(そのうち平日が2日)が割り当てられている。田植えについては休日の2日間の出役であった。また、女性で出役しているのは世帯主の妻で70歳代の人が多く、50歳代の女性はいない。

(2) 農事組合法人ひまわりの経営状況

2011年度における農事組合法人ひまわりでの収穫量は、水稻の場合、コシヒカリ3,794俵、晩稲のてんこもり535俵であった。価格面においてコシヒカリの方が高いが、収穫時期の異なる水稻を作付けすることによって、作業負担を分散している。転作作物の大麦は14,446kg、大豆は10,740kgの収穫量であった。水稻に関しては品質もよく収



第7図 入善町古黒部地区における土地利用（1993年）

（田林（2000）から一部修正して転載）

第2表 農事組合法人ほたるの損益計算書（2011年度）

費用の部			収益の部		
勘定科目	予算額	決算額	勘定科目	予算額	決算額
種苗費	1,200,000	576,150	稲作, 菜種		
肥料費	3,000,000	2,525,695			
農薬費	2,500,000	1,878,230			
諸材料費	1,500,000	1,552,833	ビニールハウス資材, 防草シートなど		
給与費	5,500,000	5,847,133	労賃, 役職手当		
福利厚生費	100,000	86,074			
作業委託費	2,500,000	1,209,142	ヘリ防除		
燃料費	850,000	751,936			
光熱水費	200,000	161,125	電気料, 下水道料		
小農具費	300,000	89,960	溝切機等		
修繕費	800,000	209,764	農業機械等修理		
保険・共済掛金	350,000	194,200	作業・建物保険, 水稲共済		
貸借料	400,000	461,964	農作業用機器, 軽四トラック等		
支払地代	6,000,000	5,939,306	21,000/10a		
利用料	5,500,000	4,976,751	乾燥施設使用料		
減価償却費	13,000,000	11,600,621			
その他	260,000	20,3032			
生産原価計	43,960,000	38,238,716			
福利厚生費	60,000	5,000	香典等		
交際費	5,000	4,460	乾燥調整御礼		
消耗品費	59,000	63,366	プリンタートナー代・PCソフト等		
会議費	150,000	120,920	定期総会等飲食代		
租税公課	600,000	928,000	不動産取得税, 固定資産税等		
その他	68,000	329,895			
管理費計	942,000	1,451,641			
営業外費用					
支払利息	0	181,743	近代化・組員借入金利息		
拠出金	1,000,000	1,337,090	町転作拠出金		
雑損失	100,000	98,730	近代化資金保証金		
営業外費用計	400,000	1,617,563			
税引前当期純利益	700,000	3,624,975			
費用の部合計	46,002,000	44,932,895			
			水稲	28,000,000	33,699,695
			菜種	100,000	55,692
			その他	0	604,110
			生産物販売高計	28,100,000	34,359,497
			刈取	0	62,984
			作業委託料計	0	62,984
			事業収益計	28,100,000	34,422,481
			受取利息	1,000	4,365
			受取配当	1,000	750
			米の戸別所得補償	8,000,000	3,943,500
			畑作継続・数量払	3,600,000	192,000
			水田活用所得補償	1,000,000	1,310,000
			産地資金	0	1,446,600
			とも補償	2,500,000	1,569,030
			収入減少緩和対策	200,000	0
			その他	800,000	343,946
			助成金等計	16,100,000	8,805,076
			雑収入	1,800,000	1,700,223
			事業外収益計	17,902,000	10,510,414
			収益の部合計	46,002,000	44,932,895
			税引前当期純利益		3,624,975
			法人税及び住民税		607,319
			当期純利益		3,017,656
			前期繰越利益	▲	1,282,067
			当期末処分利益		1,735,589

（農事組合法人ほたる『第4回定期総会付議議案』により作成）

稈量も多いが、大麦については過去最低の収量となっており、圃場整備直後の土壌条件の悪さを反映している。

資金の収支は農事組合法人ほたるとほぼ同じ項目である（第4表）。2011年における86,350,383円の費用の決算額うち、種苗費や肥料費、農薬費などの生産原価が66%の56,835,569円を占めている。また、このほかに、販売・一般管理費に収穫感謝祭などの予算が組み込まれている。86,350,383円の収益の決算額のうち、水稲と大麦、大豆の生産物販売高が70%を占めており、農事組合法人ほたると同様に農事組合法人ひまわりの重要な収入源である。収穫されたコメは基本的にJAみな穂へと出荷されており、2011年度に収穫されたコメ

4,329俵のうち、3,993俵がJAみな穂へ出荷された。残りの336俵のうち203.5俵が組員世帯の自家消費米として消費され、132.5俵が直接消費者に販売された。

農事組合法人ひまわりで主に出役をしている組員は30歳代5人、40歳代10人、50歳代15人、60歳代15人、70歳代10人である。女性の組員で出役するのは10人程度であり、従事する作業は田植機で作業できない箇所への植え付けと稲刈り前の草刈り、石拾いである。また、30歳代の組員の多くは他産業に従事しており農業機械の取り扱いに慣れていないため、コンバインなどの機械操作を担当することはない。そのため、機械操作などをできる後継者を育てることが現在の課題となっ

第3表 農事組合法人ほたるの年間事業(2011年度)

実施期間 月 日	事業名	備考
4	2～22 耕起作業	
	6～25 播種作業	
	19～30 荒まき	
	27～30 代播き	
5	1 荒まき	
	1～13 代播き	
	5～16 田植え	
	26 ハウス天井作業後始末	
	29 定期総会	
6	5 ハウス天井ナイロン巻上取納	
	6 理事会、流し込み薬剤説明会	
	11 栽培者会議	
	15 新役員役所挨拶回り、中干開始	
	24 芝張り	
	27～30 姫岩垂草定植	
	27～31 菜種刈取	
7	1～3 菜種刈取	
	1 横山地区営農組合協議会総会	
	9 理事会	
	22 ブルーベリー講習会	新川振興センターで開催
8	20 役員会	
	21 コンバイン講習会	
	30～31 稲刈り	
9	1～30 稲刈り	
	2 ケミカル散布	
	8～30 秋耕起	
10	11 コンバイン、ダンプ講習会	
	1～5 稲刈り	
	7～10 ケミカル散布	雑草、ニカメイチュウ対策
	16, 30 役員会	事業報告会
11	23 役員会	事業報告会準備
	27 営農報告会	
12	19 加工米・備蓄米生産者会議	
	1 役員会	春作業についての会合
3	2 役員会	春作業、出役についての会合
	12 育苗組合会議	横山育苗センターで開催
	13 ブルーベリー講習会	
	22 みな穂営農協議会	
	26 ブルーベリー生産組織設立総会	
	30 ブルーベリー植栽	

(農事組合法人ほたる『第4回定期総会付議議案』により作成)

ている。機械操作の講習も行っているが、平日に行うことが多く、参加者が少ないのが現状である。役員は給与制で、仕事量が増加したため2012年度から人数を増やし、理事6人、監事2人となった。出役については、理事が話し合って日程表を作成し、その後組合員の予定を聞いて調整する。農事組合法人ほたると農事組合法人ひまわりの両方に水田を保有している組合員は、所有している水田面積の大きい方の法人に出役する。出役の賃金は2009年の設立から2年間は1時間当たり1,000円であったが、その後の2年間は1,200円、それ以降は1,400円となる予定である。

主な年間の作業は4月に耕起作業、5月に田植作業、6月に大麦の刈取と大豆の播種、9月にコシヒカリの収穫、10月にてんこもりの収穫と大麦

の播種、大豆の刈取である(第5表)。農事組合法人ひまわりでは、耕起に使用する90馬力と30馬力のトラクターをそれぞれ2台ずつ、8条植えの田植機を3台保有している。田植えの際には田植機1台につき2人搭乗して操作し、また育苗ハウスから田植機に苗を運搬する人員が1台につき4人ずつ付き、計18人で作業する。1日6haずつ田植えし、7日間で約42haの作業を終える。田植機で植え付けできない箇所は、女性が手で植えていく。稲刈りに用いるコンバインはキャビン付き6条刈りのものが3台あり、1台が1,000万円の価格である。収穫した米はトラック2台でJAみな穂のライスセンターへと運ぶ。平日に作業するのは主に60歳以上の高齢者で、休日には他産業に従事している人たちが作業に加わる。

水管理は1haあたり年間12,000円で担当者に任せている。水管理者は14人おり、1人あたり3～5haを担当している。基本的に水管理に精通した高齢者が担当しているが、技術の伝承のために、14人中4人が50歳代の男性である。水管理者の仕事としては、5～8月の朝夕の水管理と畦畔の草刈り、水田の中のひえ抜きがある。特に水管理に関しては、地盤が緩いと収穫時にコンバインを水田に入れることができなくなってしまうため、重要な作業となる。

Ⅲ-2 農事組合法人組合員の就業状況

1964年における入善町総合世帯実態調査によると、古黒部地区の世帯数と人口はそれぞれ108と496であった。世帯数は1970年に106となり減少したが、その後、やや増加し1980年には113、1990年には115となった。人口は1975年に448まで減少したが、1980年に457、1990年に485と増加した。1993年における就業別の世帯数をみると、78(69.0%)が兼業中心の世帯であり、農業中心の世帯は12(10.6%)と、古黒部地区では会社勤務や公務、自営業などの他産業への従事が中心であった(第6表)。また、非農家も23(20.4%)と多くを占めていた。その後、2002年では、1993年と比べて農業中心の世帯が17(15.0%)と増加

第4表 農事組合法人ひまわりの損益計算書（2011年度）

費用の部				収益の部				
勘定科目	予算額	決算額	備考	勘定科目	予算額	決算額	備考	
種苗費	4,300,000	4,435,560	苗代	事業 収益	水稻	40,000,000	59,114,603	屑米含む
肥料費	7,000,000	7,444,130			大麦	1,500,000	557,961	
農業費	3,500,000	3,073,488	大麦殺菌剤、除草剤等		大豆	0	610,209	
所材料費	2,000,000	1,637,409	防草シート等	生産物販売高	41,500,000	60,282,773		
給与費	300,000	272,000	役員報酬	事業収益計	41,500,000	60,282,773		
福利厚生費	100,000	47,568	休憩時飲み物	受取利息	3,000	1,687	普通預金	
作業委託費	2,800,000	2,165,015	ヘリ防除等	受取配当	1,500	1,125	JAみな穂より	
生 産 原 価	燃料費	1,300,000	1,286,627	事業 外 収 益	米の戸別所得補償	10,000,000	5,701,500	米
	光熱水費	70,000	63,476		畑作継続・数量払	3,500,000	3,376,076	大麦、大豆転作
	小農具費	180,000	55,128		水田活用所得補償	5,000,000	6,230,500	大麦、大豆転作、加工用米
	修繕費	1,500,000	2,364,543		産地資金		1,659,300	大麦、大豆転作、備蓄米
	保険・共済掛金	600,000	636,891		とも補償	2,500,000	3,858,800	転作
	賃借料	500,000	725,947		収入減少緩和対策	300,000	300,228	米・大麦・大豆対象
	支払地代	15,000,000	15,509,796		その他	250,000	574,164	米・麦・大豆防除補助等
	利用料	8,300,000	8,360,204		助成金等計	21,550,000	21,700,568	
	減価償却費	5,500,000	8,419,849		受取共済金	0	2,768,361	大麦
	その他	900,000	337,638		雑収入	1,000,000	1,595,869	
生産原価計	53,850,000	56,835,569	事業外収益計	22,554,500	26,067,610			
販 売 ・ 一 般 管 理 費	福利厚生費	150,000	148,000	収穫感謝祭等	収益の部合計	64,054,500	86,350,383	
	交際費	10,000	3,780	上原ライスセンター謝礼	税引前当期純利益	11,246,752		
	消耗品費	100,000	26,418	用紙、プリンター代等	法人税及び住民税	557,760		
	会議費	100,000	80,010	定期総会飲食代	当期純利益	10,688,992		
	租税公課	850,000	1,089,900	消費税・償却資産税等	前期繰越利益	167,496		
	その他	123,000	365,742		当期未処分利益	10,856,488		
	管理費計	1,333,000	1,713,850					
営業外費用計	2,000,000	3,054,212	町転作・備蓄とも補償					
特別損失計	0	13,500,000						
税引前当期純利益	6,871,500	11,246,752						
費用の部合計	64,054,500	86,350,383						

（農事組合法人ひまわり『第8回定期総会付議議案』により作成）

し、兼業中心の世帯が63（55.8%）と減少した。これはそれまで他産業に従事していた世代が定年退職し、農業専従になったためと考えられる。しかし一方で、非農家の世帯が10戸増加した。2002年における年齢別就業状況をみると、主に60歳代以上の男性と30～70歳代の女性が農業に従事していた（第7表）。20～50歳代の男性の多くは会社勤務もしくは公務団体勤務、自営業であった。その後、2012年では、農事組合法人が設立されたこともあり、85戸（80.2%）と多くの世帯が農事組合法人の組合員となった（第8表）。現在、農事組合法人ほたるに加入している世帯が66、農事組合法人ひまわりに加入している世帯が61であり、このうち両方の法人に重複して加入している世帯が40である。以前のように専業・兼業と明確な区分をすることはできないが、聞き取りによれば、出役の多い世帯は60歳代以上の高齢者のいる世帯

であり、一方で出役をほとんどしない世帯は他産業に従事している人が多い世帯である。また、組合員の世帯の中でも、主に60歳代の男性が出役をするため、2002年時点で68人いた女性の農業従事者はいなくなってしまった¹⁾（第9表）。このように、農事組合法人の設立により、地区内の一部の高齢層の男性によって、農業が担われるようになった。

Ⅲ－3 入善町古黒部地区の経済活動の特徴

ここまで述べてきたように、古黒部地区では圃場整備をきっかけとして農事組合法人が設立され、農業のあり方が大きく変化した。2010年の農林業センサスによると、農事組合法人に属さないで農業経営を行っている販売農家は15戸のみであり、2005年の77戸から大幅に減少し、農家の多くが農事組合法人に加入したことがわかる。圃場整

第5表 農業法人ひまわりの年間事業（2011度）

実施期間	事業名	備考	
月	日		
4	2	ハウスの床平均	
	5	耕起作業開始	
	19～30	荒くり作業	
5	21, 24	発芽をハウスへ運搬	
	1	監査会	古黒部地区の公民館で開催
6	5～11	代掻き開始	
	11～17	田植え作業開始	
	20	ハウスのビニール巻上	
7	22	定期総会	古黒部地区の公民館で開催
	6	大麦刈取り日程を協議	
	10～13	大麦刈取り（14.8ha）	大家庄乾燥場を利用
8	13	大豆播種（3.23ha）	
	16～20	中干し、溝きり開始	
	22	第2回青田まわり	
9	22	22人が参加	
	2	てんこもり穂肥	
	17～31	ヒエ、クサムネ取り	
10	29	大麦の管理に対する説明会	
	1～5	ヒエ、クサムネ取り	
	11, 12	麦田の石拾い	
11	16～29	種刈り	コシヒカリを収穫
	18～29	大麦作付圃場珪酸散布、溝切	
	24	大麦種子コーティング	
12	3, 4	種刈り	てんこもりを収穫
	4～11	大麦播種、珪酸散布、溝切	
	13～30	秋耕起	雑草、ニカメイチュウ対策
13	17～19	大豆刈取	
	4～26	農業機械の点検整備	
	12～15	圃場の低い場所へ表土搬入等	
14	17	大豆圃場耕起	
	4	収穫感謝祭	宇奈月延対寺荘で開催
	19	人・農地プラン作成会議	JAみな穂本所で開催
15	21	みな穂農協集落連絡協議会	かしはら館で開催

（農業組合法人ひまわり『第8回定期総会付議議案』により作成）

備事業以前は、区画が細かく、また他農家の農地と入り組んでいたため維持しにくい農地であった。そのため、家族労働力を多く投下しなければいけない状況にあった。しかし、区画が1枚につき1haと大きくなり、さらに法人化されたことで、現在は田起こしや田植え、収穫などの際に各農事組合法人で60歳代を中心に出役すれば農業を維持することができるようになった。このことにより、他産業に従事する若・中年層の農業に従事する機会が減少した。しかし、農事組合法人で作業に従事している60歳代以上の高齢者が今後、農作業に出役できない状況になった場合、いかにして後継者を確保するかが課題となっている。JAみな穂において、コンバインや田植機、トラクターといった機械操作の講習会などが行われているが、平日に開催されるため、若・中年層の参加者は少ない。以上のように、農事組合法人になったことで、現在は農地の維持が比較的容易になり、作業負担が大きく減少したが、一方で、農業に従事する人に偏りが出ている現状もある。

第6表 入善町古黒部地区における就業別の世帯数（1993, 2002年）

就業の組み合わせ		1993年	2002年
農業中心	農業	3 (2.7)	11 (9.7)
	農業+日雇・パート	9 (8.0)	5 (4.4)
	農業+公務・会社	0 (0.0)	1 (0.9)
		12 (10.6)	17 (15.0)
兼業中心	農業+自営	6 (5.3)	3 (2.7)
	農業+自営+会社・公務	4 (3.5)	4 (3.5)
	農業+会社・公務	43 (38.1)	42 (37.2)
	農業+会社・公務+日雇・パート	25 (22.1)	12 (10.6)
	農業+自営+日雇・パート	0 (0.0)	2 (1.8)
	78 (69.0)	63 (55.8)	
非農家	自営	3 (2.7)	4 (3.5)
	自営+会社・公務	3 (2.7)	1 (0.9)
	会社・公務	16 (14.2)	15 (13.2)
	会社・公務+日雇・パート	0 (0)	4 (3.6)
	日雇・パート	0 (0)	2 (1.8)
	無職	1 (0.9)	7 (6.2)
		23 (20.4)	33 (29.2)
合計	113 (100.0)	113 (100.0)	

（田林ほか（2000, 2003）から一部修正し転載）

第7表 入善町古黒部地区における就業状況（2002年）

	男性							女性							合計
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	小計	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	小計	
農業	0	0	0	0	13	23	36	0	3	4	9	30	22	68	104
会社勤務	9	13	28	17	7	2	76	1	8	11	6	1	0	27	103
公務・団体勤務	1	3	5	4	0	0	12	3	6	1	5	0	0	15	27
日雇・パート	1	2	0	2	3	0	8	3	3	5	6	1	1	19	27
自営業	2	1	4	6	2	3	18	0	1	4	1	0	0	6	24
家事・無職	1	1	0	1	5	7	15	1	7	3	4	6	20	41	56
合計	14	19	37	30	30	35	165	8	28	26	32	38	43	176	341

（田林（2003）から一部修正し転載）

第8表 入善町古黒部地区における就業別の世帯数（2012年）

	就業の組み合わせ	世帯数
組合員	農業	13 (12.3)
	農業+公務	4 (3.4)
	農業+会社勤務	20 (18.9)
	農業+自営	4 (3.4)
	農業+日雇・パート	13 (12.3)
	農業+会社勤務+日雇・パート	24 (22.6)
	農業+公務+会社勤務+日雇・パート	1 (0.9)
	農業+公務+会社勤務	2 (1.8)
	農業+公務+日雇・パート	1 (0.9)
	農業+自営+日雇・パート	1 (0.9)
	農業+自営+公務+会社勤務	1 (0.9)
農業+自営+会社勤務	1 (0.9)	
	85 (80.2)	
非組合員	無職・家事	7 (6.6)
	自営	1 (0.9)
	会社勤務	4 (3.8)
	日雇・パート	4 (3.8)
	公務+自営	1 (0.9)
	会社勤務+日雇・パート	4 (3.8)
	21 (19.8)	
合計	106 (100.0)	

（広川幸英氏提供資料により作成）

第9表 入善町古黒部地区における就業状況（2012年）

	男性							女性							合計
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	小計	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代以上	小計	
農作業に出役 （他産業への従事なし）	0	0	0	2	10	14	26	0	0	0	0	0	0	0	26
会社勤務	8	15	14	24	4	1	66	1	4	4	6	0	0	15	81
公務・団体勤務	2	0	2	6	0	0	10	1	1	1	0	1	0	4	14
日雇・パート	3	3	4	3	6	0	19	5	8	6	7	8	0	34	53
自営業	0	0	0	3	3	1	7	0	0	0	1	1	0	2	9
合計	13	18	20	38	23	16	128	7	13	11	14	10	0	55	183

（広川幸英氏提供資料により作成）

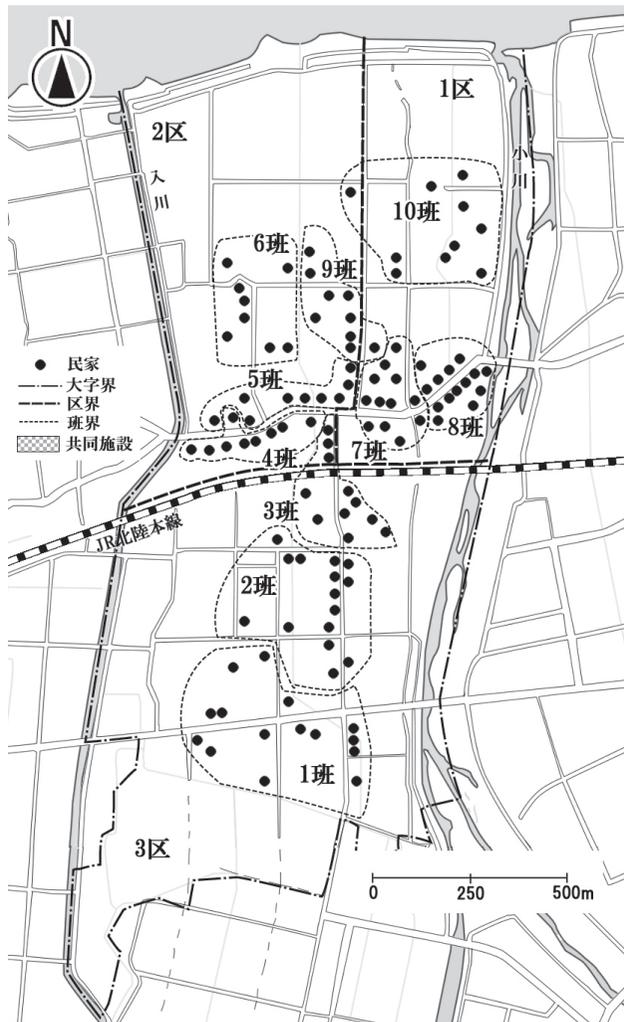
IV 入善町古黒部地区の生活組織とその特徴

ここでは、農村の持続性の実現に重要な役割を果たす生活組織の活動に焦点を当てる。古黒部地区には行政組織としての区と公民館、体育協会、児童クラブ、婦人会、盛年会、黒椀会などの生活組織が多数存在している。これらの組織の現在の状況や活動などを詳細に記述することで、古黒部地区における生活組織の特徴を分析する。

IV-1 行政・自治組織

1) 古黒部地区

古黒部地区は、3区に分けられ、さらにそれが10班に細分されている(第8図)。各班の世帯数は8~18とばらつきがある。1班の世帯が最も多く、新規の居住世帯が多いが、そのような世帯も地区の共同作業には参加している。次いで8班と4班、5班の世帯数が多い。班長は1年交代で各世帯に順番で回ってくる。また、班内の各世帯では弔事の手伝いを分担し、死亡者が出ると、まず喪主が班長の家を訪問し通夜・葬式の日時を伝え



第8図 入善町古黒部地区における区・班構成(2012年)
(聞き取り調査により作成)

る。その後、班長が班内の各世帯を訪問し、通夜・葬式の日時を伝え、手伝いを要請する。この際、不都合の旨を伝えて手伝いから外れることができる。通夜では受付を班の1～2人が手伝い、葬儀の際は班の各家庭から1人ずつが手伝いをする。香典は班長が管理し、火葬が済んだ後に喪主に手渡すことになっている。古黒部地区に居住している人に香典返しを行うことはない。地区内の各世帯の香典は2,000円と決められている。葬儀後、手伝いをした人は葬儀場において、オードブルや酒などを飲食する。

古黒部地区では区長会長1人と区長2人が選出されている。2008年までは区長会長を古黒部地区全体の投票で選び、区長会長が選出されなかった2つの区からそれぞれ区長を選出する方法がとられていた。しかし、各区で人材の偏りが顕在化してきたため、2009年から古黒部地区全体から区長会長1人と区長2人を選出し、選出された3人に、それぞれ担当の区を割り当てる方法に変更された。区長会長・区長は、1987～2007年は任期を1期2年とし、連続して務めることができなかった。しかし、2年をあけて同一人物が何度も役職を務めることが多かったため、2007年に古黒部地区会則の変更し、全体として2期4年を務めた人は再選しないことが決定された。

古黒部地区の共同作業として、江切りと呼ばれる出穂前に、圃場に深さ10～15cm、幅20cmの溝を切り、各溝を排水口に繋げ、湛水を防ぐ作業がある。この作業に参加しない世帯からは、6,000円を徴収していたが、高齢世代の増加に伴い江切りへの参加が困難になる人が増加したことをきっかけに、2007年から2,000円に下げられた。また、江切り自体も圃場整備に伴い圃場の維持管理が比較的容易となったため、以前ほど人手を要しなくなった。その他に、古黒部地区では区長と班長、消防団経験者の計16人が、1人1週間のローテーションで行う防犯パトロールがある。パトロールの時間帯・コースは実施者の裁量に任せてあり、実施時間帯などを日誌に記述することになっている。平均で週3回、1回30分程度のパトロールが

行われており、移動には両サイドにステッカー、上部にライトを置いた自動車を利用している。自動車を運転できない人は決められた帽子とたすきを肩からかけて徒歩もしくは自転車で巡回する。また、児童から高齢者まで参加し、毎月1班ずつローテーションで行う海岸清掃が、30年ほど前から行われている。

古黒部地区の行事としては、7月の最終週に児童によって行われるキャンプとバーベキュー、夏祭りなどがある。夏祭りは、1977年から始まった古黒部地区独自の祭りであり、毎年8月の第1日曜日に開催され、100人程度が参加する。午後6時から始まり、午後7時から各種団体の踊りや歌、大正琴の演奏、詩吟、児童クラブの小学生による田植歌、カラオケなどが公民館の敷地内に設置された舞台の上で披露される。また、焼き鳥や焼きそば、田楽、ヨーヨー、氷水、くじなどの夜店も地区の住民によって複数設置される。2012年度は田楽と氷水、ヨーヨー、くじの夜店があった。夏祭りの資金源は夜店の売り上げと1戸につき1,000円の徴収金である。盛年會が中心となって祭りの運営を行っている。毎年8月13日には盆踊りが催され、古黒部地区公民館に舞台を設置し、入善町在住の80歳代の音どりの男性2人を招待する。盆踊りの運営には盛年會が携わっている。また、参加者には飲み物や記念品を渡している。この盆踊りは古黒部地区から2万円の補助金が出る。15年ほど前から11月の日曜日に行われている収穫祭は、古黒部公民館を利用して行われる行事である。農家が収穫した農作物やそれを調理したものを出品し、参加者で投票して大賞を決める。投票後は即売会となる。また、その他に餅つきやビンゴゲームを行ったり、豚汁や酒類が振る舞われる。2011年度は資金難により開催されなかったが、2012年度は行われた。この他に、ビーチバレーボールクラブ、古青会と体育協会が主催していたマラソン大会、御講、本山助成、御影様、左義長といった行事があったが、現在では行われなくなった。近年では、2009年度に圃場整備に伴い電柱を移動させなければいけなくなったこと、北

陸電力から電柱使用料が請求されるようになったこと、雪による断線などの修繕に関する負担が大ききことなどから、有線放送が中止された。

古黒部地区が参加している旧横山村単位での活動として、毎年9月最終日曜日に横山小学校跡地に造成されたグラウンドで行われる横山地区運動会がある。ここでは、横山と春日・藤原、古黒部、八幡の4つの集落を単位としたグループで競い合う。また、2012年度には東日本大震災以降に横山地区の区長会と消防団の主催で行われる津波避難訓練が開催され、古黒部地区から50人が参加した。今後の継続は未定である。

古黒部地区が参加している入善町単位での活動として、入善町の安心安全活動の一環として2007年から行われている防犯パトロールがある。10校区ごとに65人程度で隊が組織され、各地区長と各種団体長、防犯組合長が各地区において4人組でのパトロールを行う。発足当初は月4回行っていたが、現在は月2回になっている。入善町が主体となって行う地域コミュニティ活動として、除排雪がある。町内の2地区にミニホイルローダーの貸与を行ったが、古黒部地区と青島地区が現在該当地区である。古黒部地区では盛年会がミニホイルローダーを管理しており、要請された場合や盛年会員の判断で積雪のある道路を除雪していく。しかし、盛年会の会員は、基本的に昼間仕事などで多忙なため、一般の地区住民が使用している現

状もある。区長が使用する際には、公道を除雪する。燃料代は入善町が負担し、古黒部地区からは事業日誌などを提出する。この他に、入善町の消防団が3日間の夜警を行い、各地区の区長も参加する歳末パトロール、2005年頃から始まり、年1回7月上旬に行われる入善クリーン大作戦にも、古黒部地区が参加している。

2) 古黒部地区の運営

2011年度の古黒部地区の収支決算書をみると、収入は各世帯への負担金が1,378,000円と最も多く、合計収入の半額以上を占め、次いで前年度の繰越金が328,643円となっている(第10表)。寄付金の250,000円は地区内に立地する一般企業からのもので、106,000円の漁村センター費は全106戸から各1,000円ずつ徴収したものである。雑入は江切りや道路愛護欠席負担金、防犯灯活動補助金、日赤募金等から得ているが、2012年度には10,000円程減額が見込まれるという。しかし、2012年度には全戸数が1戸増える予定であり、前年度繰越金が増額したこともあって、全体の収入は約70,000円増額する予定である。

支出については体育協会や防犯組合、横山地区や入善高校同窓会といった自治体や社会組織への負担金が729,630円と最も多く、次いで公民館や神社への助成金が710,000円と同程度を占めている。2012年度は自治体や社会組織への負担金が

第10表 入善町古黒部地区収支決算書(2011年度)

収入			支出		
費目	内訳	金額(円)	費目	内訳	金額(円)
万雑割	4月分	1,378,000	活動費	防犯灯改修活動、防犯パトロール活動	45,270
	8,000円×106戸				
	8月分		5,000円×106戸	負担金	体育協会、防犯組合、漁村センター、忠魂堂奉賛会、横山地区、黒東交通安全協会、日赤募金(春季・秋季)、入善高校後援会
寄付金	キタノ製作所、オークス	250,000			
漁村センター費		160,000	助成金	公民館助成費、神社助成費、維持管理助成、盆踊り助成(盛年会)、運動会助成(体育協会)	710,000
雑収入		69,679			
繰越金		328,643	役員手当	区長会長、区長、班長	120,000
合計		2,132,322		諸費	
			予備費	公民館特別補助	70,000
			合計		1,730,508

(『2011年度入善町古黒部地区3月定期総会資料』により作成)

30,000円増額すると見込まれている。また、2011年度の活動費として改修活動や環境保全美化等に約54,730円支出したが、2012年度は10,000円の増額、加えて消耗品等の事務費として40,000円、慶弔費等の諸費も約24,000円増額すると見込まれる。中でも予備費は最も増えると見込まれ、2012年度には395,384円の予算が立てられ、2011年度との差額は325,384円となった。これらを合算し、2012年度は計474,506円増額の支出予算額が出された。

以上より、2011年度の収支差額は401,814円の黒字であり、前年度とほぼ同額である。予備費の差額はこれに基づいて算出されたと考えられる。

3) 公民館

古黒部公民館は1975年に古黒部小学校の跡地に建設された。建設当初から現在に至るまで、ひまわりホールとの渡り廊下の増築以外の主立った改修はしていない。公民館の利用予約は基本的に入り口のホワイトボードに書き込み、個人的な利用、選挙活動での利用以外は原則的に無料である。利用が定期的に決まっている活動は申し込み不要で、70歳代を中心とした市民の会や、週に1回程開催される健康体操、冬季の卓球や地域のスポーツ活動で利用されている。以前は大正琴のグループも多く利用していたが、近年では利用が減少している。

2011年度の公民館の年間利用は以下の通りである(第11表)。4月に春祭り、各班による花見のほか、町議懇談会や町長会といった会合が行われ、5月には各農事組合法人の会合などが行われた。6月には専門の医師によるレントゲン検査が行われ、盛年会やPTAといった生活組織による会合も行われた。7・8月には会合や同好会による利用が減少したものの、夏祭りや盆踊りの会場としての利用や、児童キャンプ、福寿会出前健康講座といった行事が多く開催された。9月には横山地区の運動会が開催され、玉送りやりレー、じゃんけんりレーなど様々な種目が行われたため、その練習をひまわりホールで行った。10月には秋祭り、11月には収穫祭が開催され、12月には婦人会による生け花教室と年末の大掃除、各団体の忘年会が行われた。1月には旗揚げ、そして2～3月には各団体の新年会および営農法人の総会など、多くの会合が行われた。

公民館館長の業務は主に公民館の維持管理である。他にも各団体の公民館利用の管理や会合の準備、各設備の点検も行っている。2011年度には運動会の際などに使用する投光器が故障したため、入善町に修繕費用を出資してもらい補修した。また、地区で行っている海岸清掃の当番表も作成している。館長の選出は基本的に前任者からの指名で行われ、地区の行事にはすべて参加することになる。公民館の鍵は区長、班長、公民館長をはじめ

第11表 入善町古黒部地区における公民館の利用状況(2012年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
行事				春祭り		胸部レントゲン検査	夏祭り準備・練習	夏祭り	運動会練習・反省会	秋祭り	収穫祭	活花教室
				班の花見				盆踊り	健康講座			大掃除
会合	楽修会	会計監査	地区総会	班長会	(農)ひまわり総会	盛年会	盛年会総会		黒腕会	区長会	黒腕会	楽修会
	福寿会	婦人会総会	黒腕会総会	町議懇談会	(農)ほたる総会	環境委員会	婦人会		婦人会			福寿会
	生産組合総会	班長会	盛年会総会		区長会	PTA	黒腕会		盛年会			婦人会
	ウォークベースボール	黒腕会	区長会			児童会	児童会					
同好会の活動	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会	吟詠会
	卓球	卓球	卓球	健康体操	健康体操	健康体操	ウォークベースボール		健康体操	健康体操	卓球	卓球
			健康体操	ウォークベースボール	ウォークベースボール	ウォークベースボール					健康体操	
			ウォークベースボール									

(古黒部公民館資料により作成)

め、各団体の代表者が保持、管理をしている

Ⅳ-2 社会組織

1) 体育協会

入善町体育協会は旧町村を単位とした体育協会によって組織される。その1つである横山地区体育協会は、古黒部地区を含む5つの地区によって組織されている。古黒部地区の総合計画のひとつに、スポーツの推進がある。これに基づき、1人1スポーツを目標に、1993年に完成したひまわりホールを利用して、スポーツ教室の開催や、スポーツレクリエーションの充実を図っている。古黒部地区の所属する横山地区体育協会へは、婦人会や盛年会を母体として10人ほど体育協会役員を選出している。横山地区体育協会は、6月の毎週土曜日、午後9時からバレーボールや卓球、バドミントン、ビーチバレー、野球、ソフトボールなどの大会を行い、優秀選手は入善町の大会にも出場する。また、9月下旬～10月上旬の日曜日に横山小学校跡で横山地区運動会を開催している。

2) 婦人会

入善町には10の旧町村があり、それぞれで地区婦人会を組織していたが、入善・舟見・小摺戸・野中の4つの旧町村の婦人会が解散してしまった。古黒部・春日・横山・八幡・藤原の5支部で横山地区婦人会を構成していたが、八幡と藤原の支部は2012年度に解散したため、これらについては入会希望者が個人で加入している。横山地区婦人会には現在、横山支部で93人、春日支部で44人、古黒部支部で48人が参加し、そのほかに6人の個人会員を加えると、合計で191人になる。かつては「当然入るもの」であったが婦人会であるが、現在の加入率は横山地区全体で70%ほどである。65歳になって婦人会を退会する人には、人材不足のため会員としての活動を延長することを要望することもある。活動資金は会費のほかにそれぞれの地区や県の婦人会からの助成などで賄われている。また、婦人会の会費として、古黒部支部では1人につき年間1,500円を徴収している。こ

のうち800円が横山支部の資金として使用される。その他、横山地区婦人会では不用品の資源回収をしてバザーを開き、その収益を活動資金に足している。横山地区婦人会の活動は、主に女性としての教養を養う女性学級であり、手芸講習や料理講習といった10前後の講習がある。ほかにも、踊りの披露、各種団体への協力、9月最終日曜日にある横山地区体育祭でのグラウンドの整備と看板作り、婦人防災クラブを開催しての避難訓練や巡回の実施、横山地区消防団の操法大会での茶の準備・弁当配りおよび出初式のパレード行進の支援といった活動が挙げられる。2012年度は、10月に高志の国文学館と四季防災館を訪問し、11月に餅つきを実施した。横山地区婦人会では、月に1度支部長会があるが、藤原と八幡の2支部は解散してしまったので参加しない。八幡支部と藤原支部が解散する際に、横山地区婦人会の役員が2つの支部の役員に対して女性がそれぞれの地区を支える仕組みを整えることを要望した。その結果、八幡地区では様々な行事の際の食事や飲み物の世話などを、女性が輪番で行うことが決められた。しかし、女性をまとめる人がいないため、区長の負担になっている。また、藤原地区ではこのような仕組みが整えられていない。婦人会が解散される理由として、仕事が多く、負担になるということから会員が減少すること、さらに役員のなり手がいないことが挙げられる。

古黒部地区の婦人会には入会に年齢制限はないが、現在は30歳代以上の女性が参加している。年代別人数をみると、30歳代2人、40歳代14人、50歳代17人、60歳代以上が15人となっており、古黒部地区の成人女性の約7割以上が入会している。しかし、会員数は年々減少傾向にあり、特に育児をしている女性の入会率が低くなっている。退会するときは集金の際、口頭で伝える。若年層が少ないため、主として活動しているのは50歳代と60歳代である。古黒部支部での行政的な班は10班あるが、婦人会ではそれを1・2・3班、4・5・6・9班、7・8・10班の3つにまとめ、婦人会独自の班としており、それぞれから2人ずつの班

長を選出している。なお、班長は各班の中で交代で担当し、支部長は前支部長からの指名で決定されることが多い。任期は支部長、班長ともに2年である。支部長の仕事としては、各班長への仕事の振り分けと、JAみな穂が行っている化粧品等の通信販売の受付などである。しかし近年は農業に従事する女性が少なく、JAみな穂との関係もしだいに希薄になっている。古黒部支部での主な活動としては、横山地区球技大会への参加選手を古黒部地区の中から選出したり、応援等を行う。そのほかの活動として、農地・水保全管理交付金事業の一環としての公民館周辺のプランター設置活動、また新年会の開催などがある。以前は農休みとして年2回程の懇親会を開催していたが、現在では2年に1回の新年会をするのみである。このほかに横山地区婦人会主催で行っている映画鑑賞会があり、こちらには多くの会員が参加している。また、夏休みに実施される児童と敬老会会員によるラジオ体操では、婦人会のメンバーのうち11~12人が参加している。

古黒部婦人会の支部長を務めたH氏は、入善町吉原地区から古黒部地区に嫁ぎ、同郷の知人に依頼され、支部長を務めた。着任した理由について、依頼されたためというだけではなく、地区に貢献したいという思いが常々あったことを挙げている。水田の管理や区長・公民館長など地域の仕事の大部分は男性が担っているが、女性も地区のために出来ることを考えなければならないという信念をもっている。今後は、ほかの団体と共同で企画・運営するだけでなく、「婦人会でなければできないこと」をしていかないといけないと感じている。また、婦人会の日帰り旅行も温泉に行くだけでなく、イチゴ狩りやサクランボ狩りなどの体験活動を織り交ぜ、参加意欲の増進を図りたいとしている。

3) 児童クラブ

児童クラブは1980年に古黒部地区で自主的に組織されたもので、小学生を正会員とし、幼児および中学生を準会員としている。入善町や横山地区

の児童クラブの下部組織であり、小・中学生の学校外の地域活動を促進するものであり、子供の父兄が中心に世話をしている。

4) 盛年会

青年団の活動がほとんど行われなくなったこと、古青会の活動も低調になったため、1999年にこの2つの会が合併して盛年会が作られた。社会人になった若年層から42歳の厄年までの男性が会員である。近年では会員の高齢化が進んでいる。毎年8月の第1日曜日に開催されている夏祭りや、8月13日に行われている盆踊りの運営で中心的役割を果たしている。

5) 黒椀会

黒椀会は現在46歳から65歳くらいまでの男性43人が参加しており、42歳になると盛年会から黒椀会に移ることになっている。会費は年間3,000円で、各行事の資金に当てられている。古黒部地区の公認団体であるが、地区からの補助金等は受け取っていない。以前は地区の活動で小川の除草作業などにより補助金を得ていたが、現在は会費のみでの運営である。会長のほかに会計などの役員がいるが、人選は全て会長に任せられている。主な行事として、4月に新人歓迎会を行うほか、2009年度までは年に1回程度旅行へ行っていた。人員不足などの原因から現在は行っておらず、代わりに年末に行う忘年会で温泉旅行に行っている。また小川の堤防に桜の木を植えたり、苗を近隣住民に配布したりするなど地域の活動にも積極的に参加している。毎年11月の日曜日に行われている収穫祭の主催も行っており、収穫祭を15年程前に企画・提案したのも当時の黒椀会会長であった。

6) 福寿会

福寿会には65歳以上の男女が参加し、2012年現在、男性45人、女性60人、計105人の会員が在籍している。男性は68~99歳、女性は70~99歳と会員の年齢層は幅広い。結成当初は会名を老人会、

のちに敬老会としていたが、年齢を気にせずに参加できるようにという意図を込めて、「老」の字を使用しない福寿会へと名称を変更した。役員は会長と副会長、書記、監事、理事から構成される。理事は福寿会各班の班長がなる。福寿会では、花見や日帰り旅行、植栽ボランティア、夏祭り、健康講座、講話会などの行事が毎月設けられている。4月には公民館において花見を行うが、これには毎年50～60人ほどが参加し、昼間に2時間ほど行われる。年齢によって席順が決まっており、これに対し不満の声も出ている。5月下旬には日帰り旅行が行われ、2012年度は滑川市の湯神子温泉への旅行が企画された。参加費は男性5,000円、女性4,000円であった。6月中旬には植栽ボランティアが行われ、公民館の周囲に花が植えられる。参加人数は30人ほどであり、午前8時から1時間ほど行われる。花を運搬するためのトラックを出した人には1,000円が支給される。7月下旬には公民館の清掃や周辺の草取りを目的とした奉仕活動が行われる。参加人数は30人ほどであり、午前7時から1時間ほど行われた。また、同時期に公民館において朝日総合病院の看護師による健康講座も行われた。参加費は無料で、午後1時から1時間程度行われた。2012年度は生活習慣病についての講義があり、食生活における注意点を講師から学んだ。2012年7月25日には、浄化センターにおいて横山地区第1回パークゴルフ大会が開催された。午前9時から2時間ほど行われ、横山地区全体で48人が、古黒部地区の福寿会からは13人が参加した。男女比は同等である。8月初旬には、古黒部地区で開催される夏祭りに参加し、福寿会から田植え歌を歌う人が選出され、選出された人は7月中旬に練習を行った。その他、7月25日から8月10日にかけて、古黒部地区の小学生と一緒にラジオ体操も行った。9月には全国一斉奉仕活動の一環で、公民館周辺の草取りを行った。また、同時期には横山漁村センターで開催される交通安全講座に参加した。福寿会では、ここで味噌汁作りも行った。10月下旬には日帰り旅行が企画され、11月には公民館にて講話会が行われた。12月には

針供養として忘年会が、1月には公民館で新年会、2月には福寿会役員が集まり、宇奈月で監査会・前年度の反省会を行った。3月に定期総会を行い、年度納めとする。

福寿会の年会費は1,500円である。現在では、会員が死亡すると、福寿会からは1万円の香典を持参し、会長が弔辞を読むことになっている。これに対して、遺族はしかるべき金額を会に送り、謝意を伝えることになっている。また、2000年頃に福寿会の歌が作曲され、行事開始前には必ず歌うことにしている。

7) 楽修会

当初は古黒部地区への貢献活動するための社会組織として楽修会が結成されたが、班の定例清掃などもあるため、楽修会として奉仕活動は特に行っておらず、実際は懇親が目的となっている。会員は30人程度で、うち男性が約10人、女性が約20人である。最も人数が多い時で35人が所属していた。会員の年齢層は60～80歳代である。年1回6月の田植え・大麦刈りの後に旅行に行く。2012年度は宮城県に行き1泊で中尊寺や松島などを巡ってきた。また2か月に1回の頻度で会合を開いており、女性が料理を担当し、公民館で午後6時ごろから2時間程度行う。春は花見を行い、8月は夏祭りに参加しており、楽修会からは毎年順番交代で選ばれた6人が踊りを行う。選ばれた人は1週間ほど練習を行う。その後は、10月に定例会、12月に忘年会、1～2月に新年会で宇奈月温泉へ旅行することになっている。福寿会に入会したために退会する人もいるが、両方に所属している人も多い。福寿会との大きな差異は、福寿会よりも旅行なども含めて頻繁に懇親会を開催しているという点である。会長は提唱者のT氏が5～6年ほど務めたあとは大体1年交代となっている。ほかに会計が1人おり、現在は女性が務めている。1区と2区、3区の範囲にそれぞれ班長を置いており、出欠等の確認や連絡を行う。日程については他の会合を優先している。年会費は男性が5,000円、女性は3,000円である。毎回の懇親会では会

費を1,000円集め、不足分を年会費から負担するようにしている。

8) 消防団

入善町消防団横山分団には現在26人が所属しており、各地区から6～7人が構成員として参加している。年齢構成は20～60歳である。ただし、幹部には定年がない。古黒部地区からは4人が所属しており、それぞれ年齢は55歳、30歳代後半、30歳代後半、20歳代である。消防団の階級は団長、副団長、分団長、副分団長、部長、班員、団員に分けられ、古黒部地区の55歳の構成員は部長兼会計である。

行事としては、出初式への参加と春の訓練、県総合大会への参加、夜間訓練、秋の訓練、年末警戒がある。県総合大会は7月の最終週の日曜日に行われ、ポンプの操法を競い、動作・号令・統一性が減点式で評価される。審査は県の消防職員が行う。横山分団の中から5人が選出され、2～3か月間夜9時過ぎから訓練を行う。また、費用として横山地区全戸から1,000円ずつ徴収される。夜間訓練は8月の第1土曜日に行われ、午後8時過ぎに予告なしのサイレンが鳴らされる。それに応じて訓練が開始となる。本来なら日時など知らされない状態で訓練を行うべきだが、来賓の挨拶や婦人会の協力も仰ぐ必要があるため、日時はあらかじめ設定されている。

地区内で火事が起きた際には、区長が火災現場付近にテーブルを設置し、火事見舞いとして酒や米を受けとる。また、鎮火後再燃の恐れがあるため、消防団による警備が朝まで行われる。

IV-3 生産組織

1) 入善町土地改良区古黒部維持管理協議会

入善町土地改良区古黒部維持管理協議会は、土壌や用排水路の維持管理をしている。維持管理費は県からの交付金40万円で賄われている。主な作業は既存の水路に溜まった草を取り除くことである。年に1回2日程度かけて行い、経費は10万円程度である。稲刈り後の11月頃に、地元の建設会

社に依頼し行っている。農道の整備・舗装を早く行いたい、圃場整備終了後から8年間はできないことになっている。

役員は会長と副会長、会計、書記、監事2人の合計6人で構成され、任期は2年である。組合員は約80人であり、地区の重要な役割であるため、盛年会で積極的に活動している人から役員が選ばれる。

総会は年1回あり、2011年度は2月19日に決算報告が行われた。出席者は約50人で、使用した資金の用途と場所について報告した。

2011年度までは小川の堤防の野焼きを10月頃に行っていたが、火に対する規制が厳しくなっているため今年も行われず見込みである。

2) 古黒部圃場整備組合

古黒部地区では2001年1月の臨時総会で「県営担い手育成圃場整備事業」を実施することに決定したが、2002年に古黒部土地改良区が入善町土地改良区に吸収合併されることが決定していたため、事業を推進する地元組織を新たに作る必要がでてきた。そこで、2002年2月に古黒部地区圃場整備組合が設立された。組合の役職として会長と副会長、建設委員、換地委員、営農委員があり、古黒部土地改良区で役員を務めていた人を中心に計31人が役職に就いた。

IV-4 宗教組織（神明社）

古黒部地区にある神明社の神事は三枚橋に居住している神主によって司られている。宮総代は2つの班を1つの単位として5人選出され、さらに宮総代から宮総代長と副総代長、会計が選出される。任期は1期3年である。現在地区からの助成金として20万円が神社の維持経費にあてられている。主な支出としては、お供え物等の祭礼費である。

宮の行事は1月に元始祭、4月2、3日の春祭り、10月15、16日の秋祭りがある。その際に宮の旗揚げや垂れ幕の設置、後片付け、清掃などがあり、2班1組で毎年ローテーションでこれらの作

業を担当する。6月には除蝗祭(虫送り)があり、11月の新嘗祭(収穫祭)では区長と農事組合法人の代表者、圃場整備組合長、生産組合長が参加し、玉虫法典を奉納する。一般の参加者は10人程度である。

Ⅳ-5 余暇組織

1) 吟詠会

吟詠会は1984年から始まった。現在は週に1回午前中に公民館で活動している。60歳代後半以上の女性が参加している。

2) 華の会(大正琴)

華の会(大正琴)は1989年に始められ、夏祭りの際に演奏している。

3) 健康体操

健康体操は健康維持のために2人組で行うもので、毎年3~11月頃に週1回行われている。参加者は80歳前後の女性である。

Ⅳ-6 入善町古黒部地区の生活組織の特徴

これまで古黒部地区の主な生活組織を検討してきたが、40歳代後半~60歳代前半の男性が所属する黒椀会が独自の活動だけでなく、地区の行事の運営も行うなど、中心として活動していることがわかった。また、黒椀会だけでなく盛年会や婦人会といった組織も夏祭りなどの運営や出し物をしたりと地区の活動に積極的に参加している。このほかに、60歳以上の会員によって組織される楽修会と福寿会は地区の行事の運営にはあまり携わってはいないものの、各会で頻繁に懇親会や旅行を行うなど、会員同士の密なコミュニケーションをとっている。これらの会はそれぞれの会則を決め、予算・決算の資料を作成して年度末に総会を開くなど、組織としての基盤を強固にしている。これらの組織のほかにも余暇組織として詩吟の会や華の会が公民館を拠点として活動をしている。しかし、2000年代初頭の生活組織と比較すると、活力がやや低下している。田林(2003)は、行政組織

としての区と公民館、体育協会、児童クラブ、婦人会、盛年会、黒椀会などが40~60歳代までのリーダーを中心に活発に活動しており、古黒部地区すべての居住者がそこに参加して、交流する機会がつけられていると指摘している。しかし、2012年現在、盛年会や婦人会といった若・中年層で構成される組織の会員が減少しているため、活動が縮小・消滅している現状がある。特に黒椀会では夏祭りの運営に組織の会員だけでは対応できない状況に至っている。婦人会も自分の子どもの世話に時間を割かれることで、会の活動に十分に参加できない会員も多い。このように、会員数の減少に伴って、各生活組織の活動が徐々に後退している状況である。

しかし、全体としてみれば、古黒部地区の生活組織は、上記の状況に柔軟に対応しているように見える。例えば、夏祭りに関して、黒椀会による運営を支援するために盛年会が参加したり、婦人会では構成員の減少に合わせて既存の班を併合し対応してきた。また、古黒部地区全体としても人材不足の傾向があり、同一の人が何期も同じ役職を務めることが多かった。そのため、区長といった役員を務める人が不足している。そのため、話し合いによって区の規則を変更し、区長に就任する人の負担を減らすなど、現在の区の現状に合わせて運営方法を変えた。

以上のように古黒部地区の生活組織は、現在の状況に応じて組織の運営方法を変え、また組織同士で相互に協力するなど、組織としての維持だけでなく、区全体としての運営を考慮に入れて活動をしている。

Ⅴ 入善町古黒部地区の農村としての持続可能性 -むすびにかえて-

古黒部地区は1990年代まで、多くの水田の区画は約8aにすぎず、用水路や農道も狭小で、現在の機械化農業には対応できなかった。大正期から昭和初期にかけての耕地整理以降、用水路の整備や畦畔のコンクリート化、農道の拡幅が、部分的

に行われてきたが、それでも畦畔を徒歩でわたらないと到達できないような水田が多数存在していた(田林, 2003)。このような農地の状況において、農家の営農意欲は決して高くなかったが、自家と他農家の耕地が混在していたため、放棄するわけにはいかなかった。そのため、農地を維持することだけを目的とする栽培がそれぞれの農家で行われていた。営農面で不利だったが、農地を維持することに労力を必要することから、維持しにくい農地の存在が地区内に人口を滞留させる要因となっていた。以上のような背景のもとに、生活組織の活動は行われていた。各組織の会員も多く、活動が活発であり、特に40~60歳代の会員の所属する組織が中心となって地区の行事などを主催するなどしていた。その後も、各生活組織では規約を明文化し、厳格な組織運営を行ってきた。

2000年代に入ると、営農状況が大きく変化した。その要因となったのが圃場整備事業と農事組合法人の設立である。1990年代まで、圃場整備事業の施行についての議論が地区内で幾度も行われてきた結果、2004年から工事が開始された。1区画1haの耕地が造成され、それに伴い北部と南部でそれぞれ農事組合法人が設立された。地区の農業は農家による個別的な営農から、集落営農によって維持されるように転換された。また、農事組合法人が設立されたことを契機に、農地・水保全管理支払交付金が獲得された。その資金を利用して畦畔に防草シートを張り害虫を寄せ付けない姫岩垂草を植えるなど、より一層、農地基盤が整備された。営農環境が整えられていく一方で、1990年代に地区の中心となっていた世代が高齢化し、その下の世代の人口が少ないこともあり、若年・中年層によって構成される盛年会や婦人会といった組織の活動が縮小している。さらに、これまでは各農家が自作地を維持するために多くの家族労働力を投下してきたが、農業の担い手が農事組合法人に移行し、農地の維持という足かせがなくなったこともあり、今後はより一層の若年層の流出が考えられる。その中で、現在は黒椀会や楽修会を組織した世代が、若い世代の担う夏祭りの運営に携

わり、支援をするなど、生活組織相互の地区内での活動の補完が行われている。また、各組織内においても、班構成を変更したり、参加者の状況に応じて行事を再編するなど柔軟な対応がとられており、変化への対策が的確に行われている。また、農地・水保全管理支払交付金による活動は2011年度まで農地に関係する事業のみであったが、2012年度から農村景観といった地区全体の整備に関して使用することが可能となった。その資金を利用して、福寿会や婦人会などに作業を委託している。

以上のように、圃場整備事業によって区画がまとまり、農業の担い手が農事組合法人に切り替わったことで、それまで個々の農家の営農意識に基づいた農地維持から、地区全体として農地を維持する方向へと切り替わった。これにより、地区として農業の担い手を確保する意識が芽生え、若年・中年層への講習会といった担い手育成の取り組みが行われるようになった。また、農地・水保全管理支払交付金によって農地だけでなく、農村としての景観整備といった地区を構成する諸要素へと意識が向けられるようになった。さらに、その活動に生活組織を参加させることで、農業の枠組みを越えた協力関係が構築されつつある。このように、現在の古黒部地区は圃場整備事業をきっかけとして、個々人・各組織としての枠を越え、地区としての農地と地域社会の維持活動・維持意識が住民に芽生えてきている。地区を構成する自治組織やさまざまな生活組織がさらに強く結びついて、相互に関連しながら農村として持続していくと考えられる。

しかし、現在、古黒部地区にはいくつかの課題も存在している。農事組合法人や補助金に関して中心となって動いている世代は、田林(2003)で指摘された意欲的な取り組みを行った世代である。そのため、この世代が今後より高齢となり、活動を行うことができなくなった際に地区の担い手をどうするかという課題がある。前述したように、農事組合法人では次世代の担い手を育成するための仕組みが整えられているが、生活組織などの活動はさらに縮小していくと考えられる。また、

若年人口減少に伴い、地区内の活動だけでなく独居老人といった問題も出てきている。今後、いかにして地区からの人口の流出を食い止めるのか、

また、独居老人のような地区内で孤立する人を相互に支え合うのかが課題となるだろう。

現地調査に際し古黒部地区の大木宏二・谷 正和三・板沢秀秋の3区長、草 久夫公民館館長兼黒腕会会長、赤川詩津子婦人会支部長、谷博俊楽修会会長、入善町土地改良区古黒部維持管理協議会組合長山崎賢仁氏、赤川 勇氏、谷 一夫氏、広川幸英氏、広川栄美子氏らに多大なるご協力を賜りました。記してお礼を申し上げます。

[注]

- 1) 女性も収穫前の石拾いやひえ抜きなど補助的に出役するが、人数の把握が困難なため表には示せなかった。

[文 献]

- 田林 明 (1993) : 古黒部地区の生活組織. 黒部川扇状地, **18**, 121-132.
- 田林 明 (1994) : 黒部川扇状地における持続的農村の生活組織. 人文地理学研究, **18**, 243-273.
- 田林 明 (2000) : 黒部川扇状地における持続的農村の生活組織 - 富山県入善町古黒部地区の事例 -. 田林 明・菊地俊夫『持続的農村システムの地域的条件』246-304, 農林統計協会.
- 田林 明 (2003) : 『北陸地方における農業の構造変容』農林統計協会.
- 田林 明・菊地俊夫 (2000) : 『持続的農村システムの地域的条件』農林統計協会.

